【新刊書評】

沢田和彦著『白系ロシア人と日本文化』を称える

成文社、2007 年 2 月、3800 円

安井　亮平

本書は、画期的な労作である。本書によって、遂にわが国において白系ロシア人は、従来の好事家による恣意的対象から、体系的実証的な学問の一分野として自立するに至ったと断言できるだろう。

全章いずれも力作揃いだが、中でも圧巻なのは、第 10 章「「来日ロシア人（1917−1945 年）」書誌　図書編」および第 11 章「「日本で出たロシア語刊行物（1861−1988 年）」書誌」である。

第 10 章は、「おおよそ 1917 年…から 1945 年…までの期間に日本に移住、もしくは一時的に日本を訪問したロシア人、及びロシア系日本人とその子孫を対象と」し、「2006 年夏までに日本で刊行された図書で、その全頁、もしくは大半の頁が来日ロシア人の記述に割かれているもの」を、初めて文字通り網羅した書誌である。そこには、「来日ロシア人の著作」のみならず「来日ロシア人に関する著作」も含まれている。

これらの図書は、ごく少数を除き、残らず現物で確認されている。書誌編さん者として当然の作業とはいいながら、仲々実行できることではない。

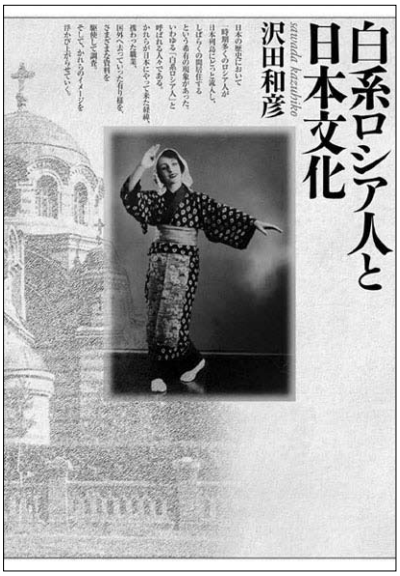
さらに特記すべきは、書誌に収録された 80 余名の人物について、「各人物の生没年、生没地と略歴」が記されていることである。これまた至難事である。この種の作業に携わったことのある人なら誰しも、いかに労多くして功少なしことが、承知しておられるところだろう。

第 11 章は、「1861 年…から 1988 年…まで日本で出たロシア語の刊行物」の、これまた最初の書誌である。刊行物は、図書、雑誌、新聞に細分される。それらも大半が現物で確認されている。この編者にしてもなお未見の刊行物が少数ながらあることが、逆に、この作業の困難さを物語っている。

第 10 章で登場した以外の人物についても、略歴が記載されている。第 10 巻と相まって、類例のない白系ロシア人の人名辞典となっている。

さらに驚嘆するのは、雑誌と新聞の全発行号数が明記されていること、および図書の「世界各地の所蔵先」が、雑誌と新聞についてはさらに「所蔵先、所蔵号数、各号の発行年月日」が、記載されていることである。何という周到さ完璧さだろう。ここに挙げられた所蔵先は文字通り「世界各地」、日本以外に、ロシア、フランス、イギリス、オランダ、チェコ、アメリカの図書館、博物館、文書館、研究所におよんでいる。これは、ロシアやチェコやポーランドやドイツやアメリカやオーストラリアへ出掛けた、足による調査の輝やかしい成果なのだが、その調査旅行たるや並大抵なものでなかった。何しろ、ハワイ大学のステファン教授から、「ハワイに来て、ワイキキ・ビーチで一度も泳がない人間は珍しいと、変なお褒めにあずかった」（「あとがき」）ほどであった。

第 10 章と第 11 章あわせて 110 ページ。本書のほぼ 3 分の 1 を占める。それに、第 6 章「『ルベーシュ』誌の来日ロシア人関係記事」（16 ページ）と、各章の注（約 35 ページ）と、巻末の「主要参考文献」（27 ページ）や「写真・図版の出典」（4 ページ）とによって、今や容易に、来日ロ



シア人関連の文献の全貌を知ることができるようになった。さらにこれらに、第 1 章「白系ロシア人のイメージ」、第 2 章「白系ロシア人と近代日本文化」および第 5 章「プーシキン没後 100 年祭（1937 年、東京）」を加えれば、白系ロシア人の生活と活動の全体像を大過なく描くことができる。本書によって白系ロシア人のもっとも信頼できる海図を得たこととなる。まさに偉業である。後進の浴する恩恵は測り知れないものがある。

共同して書誌を作製するはずだったハルラーモフさん（モスクワ、ロシア国立図書館）は、惜しくも夭折されたのだが、その遺志は見事に結実したといえるだろう。

「存在の事実そのものが歴史の闇に消え去りつつ」（「まえがき」）あった白系ロシア人が、本書を契機に甦る可能性が確実に生まれてきた。

現に沢田さんによって本書で、白系ロシア人の幾人かとその活動が発掘された。しかも共感をこめて。

1）古くは、日露戦争の直前に北陸地方を旅行した日本語専攻の学生（第 3 章「パーヴェル・ヴァスケーヴィチの北陸旅行」）。やがて外交官となった彼は、革命後神戸に住み、そこで亡くなった。

2）1937 年に白系ロシア人が東京で開いた「プーシキン没後 100 年祭」（第 5 章）。この論考によって当時の在日白系ロシア人の「生活の流れ」や文化的水準が明白になった。

3）1920−40 年代に大阪外国語学校でロシア語を教えた、錚々たるネフスキイ、プレトネル、ロマーエフといった顔ぶれ。そしてその後のそれぞれの運命（第 8 章「大阪外語のロシア人教師」）。

4）20 世紀初頭から 30 年代前半にかけて、アムール川やカムチャトカやサハリンで漁業に携わったリューリ一族。革命後彼らは横浜や函館や神戸に住み、のちアメリカに移住した（第 9 章「漁業家リューリ一族」）。

数奇で苛烈な運命に翻弄された白系ロシア人に沢田さんが寄せる熱い思いが、とりわけ感じ取られるのは、第 7 章「女優スラーヴィナ母娘の旅路」である。

第一次世界大戦、革命、国内戦、日本への亡命、関東大震災、第二次世界大戦、その後の冷戦と、歴史の激流に呑み込まれた、母娘孫 3 代にわたる 1 世紀。彼らの「旅路」は、ベラルーシからユーラシア大陸の東端ハルビン、ついで日本、最後にはアメリカにまでおよんだ。

だが、逆境の中彼らは誇り高くたくましく生きた。舞台女優の母は娘らと日本で「スラーヴィナ劇団」を結成し、日本全国を巡業した。娘はやがて人気映画女優となった。孫のコンスタンチンは、公爵家出身の祖母にロシア正教とロシア文学を「生きる糧としてたたきこ」まれた。日本語で 2 冊のすぐれた詩集を発表している。2004 年ボストンの正教修道院に移り住み、アレクサンドル神父となった。翌年秋遂に初めて母国ロシアを訪れ、数か月後昇天した。

この文章には、著者に前述のハルラーモフさんとともに決定的影響を与えた（「あとがき」）コンスタンチンさんとの出会いと深い交わりが、見事に花開いている。この 2 人との友情と魂の共鳴こそ、沢田さんをひたむきに白系ロシア人研究に突き動かしたものだったのだろう。

第 7 章が大歴史小説とするなら、第 4 章「ワシーリイ・シェルストビートフと室生犀星」はさしずめ好短編といえよう。

シェルストビートフは、「名もなき市井の民」ながら、いかにもロシア的な、「信仰心が篤く、高潔で、「清貧」という言葉を文字どおり体現した人物」で、超俗の風格があった。犀星との東京とハルビンでの交遊ぶりも、何とも好もしい。

彼の最期について諸説あるとか、関東大震災の際彼が無断で持ち出したという仏像をめぐる不可思議なエピソードとかも、いかにもこの人らしい。謎のままおくほうが、生の深淵を垣間見る感があって、かえって良いように感ずるのである。

白系ロシア人の文献に通暁した沢田さんの頭の中では、きっと、もろもろの人物や出来事がひしめき、うごめいているに違いない。それらがさまざまな物語となって甦る日が、しきりに待たれるのだ。

最後に、第 1 章中の「ソ連のイメージ」について一言。「ソ連のイメージ」は複雑なテーマだから、それを本書で引証されている 3 冊の書に代表させるのには、大いに疑問がある。白系ロシア人に対すると同様に、体系的実証的に検討すべきだと、考える。その暁には、白系ロシア人もまた相関的に新しい相貌を見せるのではないだろうか。

【新刊書評】

長縄光男著『ニコライ堂遺聞』

成文社、2007 年 3 月、3800 円

清水　俊行

同著者による日本正教会研究の初穂ともいえる『ニコライ堂の人々』（1989 年）が出版されてから、はや 18 年が過ぎ去った。だが、その後発表されたこのテーマに関する同氏の研究業績を一瞥すると（それらが本書を構成しているのだが）、その穂はますます大きく膨らみ、これがはや一世紀半になりなんとする日本正教史において中心的役割を果たしてきたロシア人宣教師と日本人正教徒の活動に関する、最も信頼に足る研究として実を結んだことを実感させてくれる。同氏は本書を前著の「姉妹編」と称しているが、こうした息の長さこそ、日本正教会の成立と、その中で営みを続ける「人間」に向けられた関心の焔が、氏の主要テーマであるゲルツェン等 19 世紀ロシアの思想家に対する視点と時に睦み合いながらも、途切れることなく燃え続けたことの証しであろう。少なくとも、18 年前に日本正教会の一イデオローグをめぐって開始された探索が、「正教会」という特殊な社会の中に封印されてきた「日露関係史」の解明に接ぎ木されたことで、もはや他人事ならぬ、氏御自身の歴史観を「自己表出」するための格好の土壌を得たことは確かなのである。

本書で扱われているテーマは、日本正教会の設立者たる宣教師ニコライについてはもちろん、その同労者であったロシア人司祭マホフやアナトーリイ等をめぐる知られざる真実、初期函館教会をめぐる諸事実、日本正教会の文化的営みを表す様々な側面、ニコライ自らが携わった語学教育の実態に始まり、日本正教会の最盛期にあたる 70-80 年代を象徴する高清水教会（宮城県）の